

幼児期における「KONJO（根性）の成長

浅野 弘光

文化創造学部初等教育学専攻

(2006年11月9日受理)

The Development of “Konjo” in early Childhood

Faculty of Cultural Development, Department of Cultural Development,

Major in Primary Education,

Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

ASANO Hiromitsu

(Received November 9, 2006)

1. はじめに

「根性」という風土の言葉は、仏教用語として使われはじめるが、その後、さまざまな意味をもつ言葉として日本人の中に定着してきた。

例えば「輪中根性」「島国根性」「貧乏根性」「根性のあるやつ」「スポーツ根性」などとその使い方は、前向きにも、後ろ向きにも使われている。しかも、継続性のある子どもを「根性のある子」と言えば、我慢強い子どもを「あの子は根性がある」などと使う。その意味付けも「根性」を言葉として使う人の恣意によって異なるのである。

端的な言い方をすれば、根性に含まれる意味のエリアは大きく、定義できないのが現状である。

そのため国語辞典も（新選、国語辞典、小学館）その人の性質を貫く根本的な気質、と同時に「いやしい精神」を上げ、前向きな意味と後ろ向きの意味になっている。

一方、外国語においても、Spirit や Guts を上げ、気迫や闘志に近い感覚で受け止めてい

る。日本語の根性と合致するものではない。

そこで、本稿では幼児期という比較的本性を素直に表しやすい幼児期を捉えて、その成長過程を学際的な感覚で追ってみたい。

事例1 研究素材としてのK子とN子

K子とN子は、2006年の本学紀要に掲載した「相互行為からみた幼児の好奇心と向上心について」の中心的な観察素材であるが、再び、この2名を主たる素材とし、他の事例を加味することでテーマに迫ってみたいと考えた。

この2名を選んだのは、姉妹関係でありながら、両親が育て方を変え、2名の主体性をそれぞれの方法で喚起する方法をとったことである。これを端的にいえば次のようである。

K子 丁寧な育てながら主体的な行動を励まし誉める努力を続けた。

N子 丁寧な育てながら主体性の芽を引き出すように協働する形を続けた。

その結果、好きなことには熱心で根性を発揮するK子と何でも熱心で一時的に熱中するN子の態度として現れた（小学校入学以前）

2名は、一般的にみると「根性」があると

他人は言うそうだが、N子の方が精神的に安定的であり、K子よりもN子を貫く根本的な気質（temperament）が育っているのではないかと思われた。

先に学際的な感覚で追ってみたいと述べたが、人間の知的、身体的、道徳的、情緒的発達にとって最も基礎的な教育の領域に「根性」が含まれると考えるからである。

2. 根性を構成する要素

先にも触れたように根性は、多様な要素によって構成されている。図1は、そのモデルである。逆三角形の左右の辺は、左に、我慢力、集中力、持続力（継続させる力）

やる気、楽しみ（目的を含む）、挑戦力、好奇心、興味関心、などがある。左を根性の外見的要素としたい。（外側からの観察で見られる状況）これに対し右は、強制という励まし、誉めるとい励まし、愛するという保護などの支援的要素である。



図1 根性の構成要素

しかも、逆三角形に立っている。これは幼児期における根性が不安定なものであり、根性が成長して三角形の底辺（図1の上辺）に達しても、崩れてしまう不安定さをもっていることを表している。

- ・根性は不安定な気質である。
- ・右の支援的要素のエネルギーの大小で根性の安定度に違いが出てくる。

その事例をK子でみてみたい。K子は『丁寧]に育てながら、主体的な行動を励まし、誉

める努力によって6才まで育った子ども』である。

事例2 後退しやすい根性

K子は3才ころから親のリードで絵本を読み始めた。母親の性格であろうか。与える絵本は、シンデレラのようにきれいな子どもの登場する本であった。この影響が大きく、塗り絵も、お絵描きも、折り紙も全て「お姫さまタイプ」の作品であった。K子はできるたびに誉められた。そして「もっと読もうね」と励まされた。お姫さまタイプの絵本は、何回も続けて根気よく、読み続けられた。中には、背表紙がとれてしまうまで読み続けた本もあった。6才ぐらいになると両親は、本屋につれていき好きな本を買わせたが、欲しいという本は、白雪姫、かぐや姫、一寸法師などであり、父親の勧めで『世界おもしろ事典』などを与えたがページをくるだけで熱心ではなかった。本を読むという行為自体が崩れていくように感じられた。やや戸惑った両親が「強制」することを止めたが、本に対するK子の執着心は、2年間ほど「本ばなれ」を起こした。

先の図1からみれば、右の「家族の支援」が、左の集中力、やる気、楽しみ、興味関心などを崩していったのである。K子は誉められ、励まされ、家族から大きな支援を受けながら「根性」を発揮してきたが、親の勧める本と（強制）K子の好みがずれると、本読みに対する「根性」が、後退したのである。これが根性の不安定さである。（8才になって、K子の本読みは多様な本に急激に広がった）

ここでやや大胆な表現になるが、6才ごろまでの根性は、教育環境の些細な変化によって「その人の性質を貫く根本的な気質」が直ぐ後退しはじめる不安定さをもっていると言えそうである。しかし、乳児期から励まされ、誉められて育った根本的な気質は、多少の教

育環境の変化では、消滅するものではない。

一方N子はどのようであろうか。

先に触れたようにN子は『丁寧な育てられながら主体的な芽を引き出すように協働の形』をとって育てられた。

幼児期におけるN子の根性は、あらゆる事柄に関心を示し、直ぐ飛びつき熱中するが継続性は短く、また直ぐ、他のものに関心をもち飛びついて熱中するという状況であった。読書においてもK子のように「お姫様の本」に限って読むというのではなく、文字や絵の書いてあるものは、何でも見た。まるで大人が速読しているようにページをめくり「面白い、面白い」を連発した。しかし、精読し、読みこなす様子はなく、問われれば、本の内容を大よそ話せる程度であった。

それは、全ての遊びに通じるN子の活動であった。外から見る限り「根性があるN子」とは、言えなかったが、一時的な集中力、継続する力、やる気、挑戦力、好奇心、興味関心など図1の左辺にあたる要素は、旺盛であった。今述べたように「瞬間的燃焼」とでも言える状況であった。とても、根性があると言える状況ではなかった。

3. 根性の成長に必要な動機づけ

N子が7才を迎えると、本屋の床に座り込み、「不思議」に関する本、「滑稽本」に関する本探しに夢中になった。本屋の床に座ったまま1時間でも2時間でも探し続けた。時には、探している内に読んでしまい、買ってやろうと待っている母親が待ちきれないで「早く決めてよ」などと怒り出す場面も出てきた。

買ってもらったなら、他の全てを忘れて本に夢中になった。大好きなおやつさえ食べないで本に熱中した。しかし、読み終わると「もう過去の本」であった。本棚にある読み終わった本を再び読み返すという行動はなかった。

このような状態になったのは、母親の証言によると馬場のぼる著「11ぴきのねこ シリーズ こぐま社」の11ぴきのねこ、11ぴきのねことこぶた、11ぴきのねことへんなねこ、11ぴきのねことどろんこなど、に出会ったのがはじめて、次に「かこさとしの自然のしくみ 地球のちから絵本」で本に夢中になったという。

11ぴきのねことかこさとしの絵本が動機づけになったのであろう。

動機を起こさせる要因は多い。図1の右の強制模倣、同一視 (identification)、モデリング、人間関係などであるが、N子の場合、次の要因が強いと考えられる。

模倣 二才上の姉が8才になって再び本に夢中になりだしたこと

モデリング 父親がいつも新聞や雑誌を読んでいたこと

このような教育環境の変化が左の要素を刺激して、N子の動機になったものと推察することができる。

この事実を端的にまとめると、幼児期の教育環境で育った根性の要素は、精神的な発達とともに、教育環境に変化が起こるとその人の性質を貫く根本的な気質が再成長を始めるものと考えることができる。

先に姉の模倣、モデリングとしての父の様子は、まさに教育環境の変化と考えることができる。

『子どもは思うように育たないが、大人(年

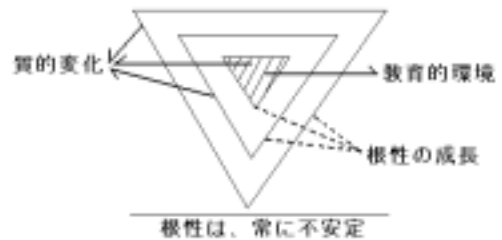


図2 根性は不安定

上)のしているように育つ』とは、このことであるまいか。(根性の成長も、この言葉に類するのであろう)

今までのことを図2にまとめてみた。

4. 根性を成長させる要因

図1でも触れたように「根性」は、外からみて分かる状況も多いが、少しの環境変化で、外から見えなくなったり、時には隠れてしまったりすることがある。そのため図2のように逆三角形で表し、その不安定さを示した。

この図2は、根性の成長を模式化したものである。先に触れたように根性を構成する要素は、我慢力、集中力、持続力、意欲(やる気)、楽しみ(目的成就)、挑戦力、好奇心、興味関心、などによって構成されている。外からみて「根性がある」かのように受け取れても、右の環境の変化だけでなく、左の要素の一部が欠けても根性は、不安定な状況を現す。次の例は、一つの証である。

事例3 幼児期の特色

N子が極端に「根性」を後退させたのは母親が事故で入院し(環境の変化)、家庭の中心が祖母と祖父になったときである。N子は相変わらず、挑戦的でやる気旺盛、何にでも関心をみせる子どもであったが、集中力と持続力を欠き、身体全体にみなぎらせていた「根性」が弱まり、何でも直ぐ投げ出し、ぼやっ

我慢強さ	極端な衰え
集中力	同
持続力	少し後退
やる気	やる気は旺盛だが長続きしない
好奇心	好奇心は高いが長続きしない
興味関心	興味関心は高いが長続きしない

図3 根性を構成する要素のバラつき

としていることが多かった。

よく観察すると左の要素にバラつきがあるようにみえた。祖父母はN子を励まし誉め続けたが、根性と外からみえる様子は後退するばかりであった。

これを家族は「N子のあかちゃん返り」と呼んでいたが、N子の性質を貫く気質に、何らかの後退が起こったものと考えられる。言い換えれば、左の要素の成長にバラつきができたのである。

これは、どのような理由によるのであろうか。3の小見出しに「根性を成長させる要因」としたのは、根性を構成する要素に質の成長・後退があると考えたからである。この場合の成長を、「心身の構造と機能における量的、質的な変化の過程」と、捉えたとき、図3の我慢強さの衰え、集中力の衰え、持続力を後退させたのは、成長の停滞と受け取ることができる。いわゆる心身の構造と機能における量的、質的な変化の過程を動かすエネルギーが衰え一時的に成長が停滞したものと考えることができる。この質的变化は、なぜ起きたのかを事例4でみてみたい。

事例4 絶対信頼関係の途絶

先にも触れたように後退は母親の入院とい

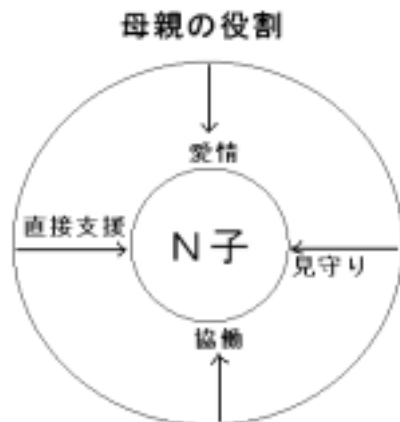


図4 絶対関係の弱まり

う状況の中で起きている。図4はその模式図である。図4の一番外の円は、母親の役割のエリアである。この枠の中で母親は、愛情を注ぎ、見守り、支援し、協働を続けてきたのである。

ところが母親の入院という教育環境の変化で、N子に向うはずの母親の役割が崩壊し、祖父母に変わった。この外枠の変化は母親の愛情によって結ばれていた「絶対信頼関係」に揺らぎが起こり、根性を支えていた要素が萎えたものと考えられる。

平成17年度の岐阜女子大研究紀要でN子は、困ったことや気持ちが不安定になると母親に抱きつく癖があると書いた。したがって、母親の入院で、不安解消の手段をN子が失ったことを意味する。祖父母への抱きつきでは、心身の不安定さを解消することができなかったのである。

母親との絶対信頼関係が弱まり、心身の構造と機能を量的、質的に変化させるエネルギーが弱まったのである。この小論が幼児期と限定しているのは、幼児期における母親の役割の大きさが「根性の成長」に強く関わっているからである。

2週間ほどして母親が退院するとN子は、入院以前より、強い根性を発揮し、運動会を前に次のように話した。

「わたしね。50メートル競争で一等になるよ。でもね。わたしより一歩速い子がいるの。40メートルぐらいになると、その子に抜かれるの。だから、70メートル走る練習をしてスピードが落ちないように練習しているの。おかあさん見に来てね」

まさに、母親との絶対信頼関係の復活による「根性を構成する要素」に成長のエネルギーが働いた結果である。端的な言い方をすれば、

図2の内枠に描かれた逆三角形が外に向けて、じょじょに成長していく核部分に家族との（両親）信頼関係が強く働いていることを示している。内から外側に成長する様子は、成長の質的变化を表している。

5. 「あの子がね」という見方（事例5）

「あの子は小さい頃、毎日何かあると「できない、できない」と泣いていたのに、父親が亡くなったころからすごく根性がでてきて、音楽については鬼になったね」という話がある。Aは小さいころから音楽が好きであり、器用であり、何でもこなす子どもであった。教員であった父親の教育環境の中で、励まされ、誉められて成人してきた。父親がなくなるとAは、急にといえるくらい自立し、音楽と「書」、そしてある信仰団体の奉仕に「熱心を通り越し、根性の塊り」のような活動の形に変化させた。作曲を始めると、家に帰らずピアノのカバーを被ってひと眠りし、できるまでやめなかった。さらに、自分の職務も人一倍熱心であった。

これをどのように解釈するのであろうか。根性が環境の変化によって、突然できあがるものであれば、『幼児期における根性の発達』というテーマは、意味がないものになる。

Aを外から観察すると図5のようにAの行動を感じるができる。Aの身体全体に『目標達成の喜び』が滲み出ていたように感じられる。目標の達成は楽しみに当たり、その活動のための努力がAの「音楽における自己主張」のように感じられた。

絶対信頼していた父親の死は、Aの気持ちを開放し、Aの性質を貫く根本的な気質が自由を得たものと解釈することができる。

この開放をプラスの根性に転化させたのは、音楽で何かをやってみたいという目標達成の根性ではないであろうか。

よく「子どもの遊びに拘束はいらぬ自由で好きな遊びこそ学びの原型である」と言われるが、Aの中に眠っていた自由で好きな遊び(学習)が目覚めたのであろう。

(事例6)

何か重たいものが取れた感じで、音楽で何かやってみたいという気持ちが抑えきれないのですよ。幸い、K小学校で児童オペラを作る機会があって、父には申し訳ないが、この歳になって自由を得た気持ちです。一分たりとも、遊んでおられない気持ちです。

こんな気持ちをもっと早く出たらと思います。 A31才

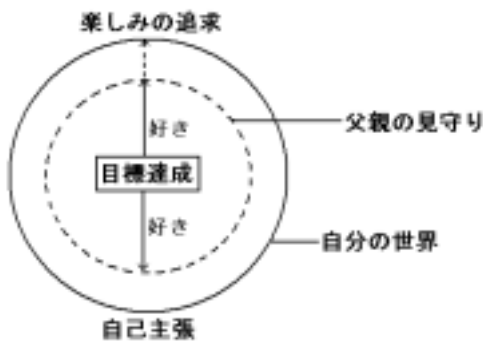


図5 Aの根性の発露

6. 「楽しいから好き」を育てる

これまでの事例から、根性を育てるには、動機づけが必要であり、ここでできた根性の芽を育てていくためには、家族の間の絶対信頼という愛が必要であることが分かった。逆に、親の熱心さが「育ちかけている根性」を拘束している場合もあり、根性は強制で育てるより、楽しく育てる方が、根性として行動化されやすいことも分かってきた。

このように考えてくると、図1の根性を構成する要素に「好き」を加える必要ができた。幼児における親の強制を否定しないが、

意識する、しないに関わらず「あの行動をすることが好き」という状況をつくる必要があるであろう。

好きという心的状況は、逆三角形の不安定さを比較的安定させていく要因になると考えられる。

N子の場合、母親の入院という教育環境の変化で後退状況をつくったが、もし、読書が楽しい状態にまで育っていたら、後退状況も短くて済んだかもしれない。しかし、本当に幼児期にまで図5の模式が適用できるのかどうか、疑問を残すところである。

7. 根性を定義する難しさ

図2の内側に描かれた逆三角形の根性がじょじょに外枠の逆三角形に成長していく核部分に家族との信頼関係が働いていることは「4」でまとめた。端的に言えば、根性の質的变化(成長)は、親と家族の相互行為を伴う信頼関係に大きな働きがあった。しかし、それに加えて、さらに成長の質的变化を促すものとして「好きだから」「やり遂げたいから(目的達成の意識)」という要因を加えることが必要であった。この好きや目的達成意識が幼児自体にどれほど自覚されているかは明確でないが、根性の成長に関わっていることは、確かであろう。

ここまで根性の表記を「根性」と書いてきたが標題には「KONJO」としたのは、下記にまとめたように根性は、多様な解釈がなされ、「根性」という国語的概念では表現できないように感じたからである。しかし、根性を概念としてまとめることを否定したわけではない。幼児期の根性は、特別な意味をもっていると考えからである。まず一般的に根性は、次のように表現される。

仏教では「仏の話を聴く衆生の素質や能力」を根性と言う。

島国根性の根性は「偏狭でこせこせしてゆりのないこと」を指す。

輪中根性の根性は「自分を守るために他人や他村の悲劇(失策などを含む)を笑う心根」を言う。

学問根性とは「困難なことを乗り越える継続的な学術的行動力」を言う(茂木健一郎談)

スポーツ根性「耐えて耐えて勝ち抜くまで頑張る行動力」を言う。

前にも少し触れたが、「根性」という言葉の中に人間として前向きな意味と後ろ向きに聞こえる意味がある。例えば、わが子だけを大切にし、先妻の子どもにつらく当たる継子根性などは、心根が曲がっているという意味で後ろ向きの根性に当たる。

このようにさまざまな意味を含むため英語においても spirit, guts, grit などと表現が定まらない。むしろ根性を表現する言葉がないといってもよいのではあるまいか。類語研究会(創拓社)においても根性の類語として気質、性分、根気、気心など、意味が違うのではないかと思われる語彙を並べている。難しいのであろう。このように考えると、幼児期の根性は、ますます特別な意味をもつものとして「KONJO」と表現しておくのが適切であると考えた。

8. 幼児期の KONJO の特徴

幼児の konjo は、大変崩れ易く幼児期に konjo があるかに見えた幼児(6才ごろまで)も成長するにつれて普通の子どもに見えてしまうことがある。逆に事例5のAのように、根性があるとは見えなかったが、父の死という動機によって「稀に見る根性」を発揮する成人もいる。

成人と幼児の根性は内容が異なるのであろうか。

これと同じ状況を表す精神活動として「我

慢・集中力」などがある。「5」の根性を定義する難しさで触れたように、幼児の konjo の成長に好き嫌いや目的意識が含まれるかどうかは大きな問題である。この好き嫌いや目的達成意識は、親などの教育環境によってつくられるものであるという意見を聴くことがある。この意見をまともに受け継ぐならば、幼児期における konjo の成長というテーマは、親の教育環境によることが結論になってしまう。

次の事例7で考えてみたい。

確かに、幼児期の konjo は不安定であり、崩れやすい。好きなものになると konjo を発揮する時間(継続時間や集中力)が長くなる。しかし、「好きだから長く続けられるの」と尋ねても「面白い」としか答えが返ってこない。これを無自覚的 konjo と呼ぶことにした。したがって、幼児のころから konjo があつたから児童期や生徒期、成人になって根性が発揮できるわけではない。無自覚的 konjo を自覚的根性に引き上げるのが、教育環境の役割である。ここに幼児期の konjo の特徴がある。konjo は不安定であり、崩れ易いから教育環境を整えながら成長させなければならない。しかし、一般的に恵まれた幼児期を過ごせる人は、多くない。幼児期の教育環境が低いと、社会で言われる「ひねくれ根性」「貧乏根性」「ぐうたら根性」をもった幼児に育ってしまう例がある。ひねくれ根性やぐうたら根性は、自覚的根性の場合が多い。前年の紀要で述べたが2才児のK子がアパートに住んでいたころ「おうちチッチャイ、チッヤツイ」と祖父母に訴え、「おふるチッチャイ」と祖父母の風呂をみて話したのは、自覚的であった。このとき心に残した気持ちは、その後の生活の中に「大きいものへの憧れ」として残っている。(ひねくれ根性にまでには至らない)

幼児期の konjo は、外から見て根性がある

ように見えても無自覚的であり、不安定で崩れ易い。したがって、図1で表した「根性の構成要素」の左側の要素も不安定なのである。

我慢づよい子に見え、何に挑戦してもでき、評判の幼児Iは、児童となったときライバルSにかけっこで負け、負けたことを親からなじられたことを切っ掛けにして、一挙に無気力人間になり、問題児にまで転落した。幼児のkonjoは崩れやすいのである。これが無自覚的根性の証である。ごく普通の表現をすれば幼児のkonjoは、自覚的根性に成長するまで「崩れ易い」のである。

さらに、自覚的な根性になっても特別な体験や経験を経ないかぎり、幼児のkonjoほどではないが不安定であることに違いはない。図1の逆三角形であることに違いはない。

これを端的にまとめると、「幼児期のkonjoは、幼児の性質を貫く根本的な気質として成長するが、無自覚的な気質の一つであるため、幼児を取り巻く教育環境の些細な変化によって(不安定要因の拡大)後退し、崩れ去ってしまうことがある。その反対に後退はしているが児童期以上の年齢になって幼児期のkonjoがある動機によって『その人の性質を貫く根本的な気質』として行動に現れることがある」と考えたい。

9. 弾力的な KONJO

先に学際的な感覚で根性を追ってみたいと述べた。しかも、幼児期と成人との根性の構成要素が違っていた。その上不安定なものであった。そのため、根性やkonjoを大胆にとか、端的にとかの飾りを付けてまとめてきた。この紀要の内容は、研究結果より、今後の研究のための課題提供といえるかもしれない。

そこで、K子とN子の「根性状況の比較」と言えそうな表を載せたい。

田中美知太郎氏は、『われわれが、日本人

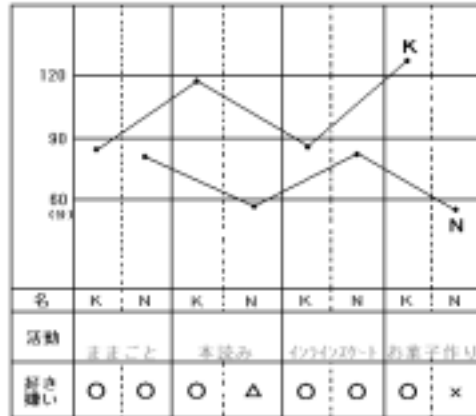


図6 K子とN子の根性的一面を比較する (6才児当時) 2005, 11

の特性と考えているものも、案外、他に類例がたくさんあるかもしれない。だから直ぐ、これは特殊なものか、普通のものかを決めることを避けたい』と語ってる。この特性のところに根性やkonjoを当てはめてみると、日本人の根性と考えているものも、案外、他に類例がたくさんあるかもしれない。だから直ぐ、日本人の根性が、特殊なものか普通のものかを決めることを避けたい。即ち、K子やN子に限られた研究素材だけでは「根性, konjo」を説明しきれないかも知れない。

したがって、来期は根性の構成要素の一つである「集中力」から追ってみたい。

参考資料

- アспект「根性を科学する」高畑好秀 学研, 仏教辞典
- 洋泉社新書 島国根性を捨ててはいけない 布施克彦
- 講談社現代新書 集中力 山下富美代
- 岐阜女子大紀要35号 Investigation on the curiosity and Motivation of Interacting infant 浅野弘光
- 吉川弘文館 頑張りの構造 天沼 香
- 岩波新書 能力とは何か 岡本夏木